

「わたしは初めであり、終わりである」

ヨハネの黙示録 22章 12節～13節

説教 軽込 昇 牧師

神学生の頃、無牧の母教会で夕礼拝の担当をしました。集まるのは数人。雨や雪の日、誰も来なかった日が数度ありました。ストーブの始末をし、電気を消してトボトボと帰る道で「わたしは初めであり、終わりである」(13節)とのキリストの言葉が私の心と体に刻みつけられました。

ヨハネ黙示録は紀元90年～95年、キリスト教への本格的な迫害が始まった頃に書かれました。キリストを信じる故に殉教していく仲間が続出します。信じ続けたいと願っても、この世の力があまりにも強く、信仰を持ち続ける自信はありません。教会そのものが消えてしまいうです。パトモス島に島流しにされたヨハネに、神ご自身が、主イエス・キリストこそが主である、というこの世の真実の姿を啓示されたのです。

黙示録は、「終末」について書かれているといわれますが、「終末」は目標、目当てという意味を含み「完成」という言葉の方がふさわしい。神は、始めから終わりまで、アルファからオメガまで、最初から最後まで、この世のすべてを支配され、完成されるというのです。終末はわたしたちの「罪の赦しの完成」です。神に造られた時の本来のわたしたちに戻れるのです。わたしたちが終末を恐れるのは、どこかに、罪が赦されているという安心がないからです。わたしたちの信じるキリストは十字架にお掛かりくださり、復活された主です。わたしたちの罪は贖われました。そのことが完全な姿で実現する、それが終末です。

わたしたちは信仰心があるから信じているのではありません。わたしたちが信じる力よりも、信じまつるキリストのほうが強いの、と信じ、キリストに委ねていく、それが信仰です。「見よ、わたしはすぐに来る」(12節)。「屠られた小羊」(第5章12節)である。主イエスが、十字架に掛けられ、復活された主イエス・キリストが「わたし」と宣言し、「すぐに来る」と宣言してくださいませ。まことの人間としてわたしたちの間に生まれ、十字架にかかってくださった、そのお方が、わたしたちにご自身を示してくださいませ。

終末を待つ、再臨信仰に生きる。それはこの世の与えられた場で、それぞれ責任をもって、神のご支配を信じて祈りつつ生きる、生き方です。キリスト教は祈りの宗教です。初代教会の人たちも困難であればあるほど祈りました。キリストの足跡をたどりたいと願いつつも、肝心の足跡がわからなくなることがあります。その時こそ、主イエスよ、わたしたちはあなたがわたしたちの前を歩いてくださり、後ろを歩いてくださると信じたいのです、信じさせてください、と祈りましょう。

ヨハネは、今、牢で一人で主の日の礼拝をしています。この同じ時、ヨハネの属していた教会では礼拝が捧げられ、彼のために熱心な祈りがなされていたはずですが、わたしたちにも、今礼拝に来たくても来られない友がいます。病気や高齢のため、礼拝を守りたくても守れない方がいます。その人たちのためにも心を込めて礼拝しましょう、讃美を歌いましょう、祈りましょう。それがわたしたちの生きる道です。

「見よ、わたしはすぐに来る」と主イエスは約束してくださいませ。「わたしは初めであり、終わりである」と宣言されるお方がおいでになります。「然り、わたしはすぐに来る」(20節)、だからこそ「アーメン、主イエスよ、来てください」(20節)とわたしたちは祈るのです。

わたしたちの救い主は、主イエス・キリストです。わたしたちがキリストにつながりたいと願っても、かなわないかもしれない。しかし、わたしたちの腕をつかんでくださるキリストのお力は強いのです。わたしたちの前を、主イエス・キリストが歩いておられます。すべての困難な道を切り開いてくださいます、わたしたちは主イエスの背中を見つめて、その後を歩めばいいのです。そして、わたしたちの後を主イエスが歩いてくださいます。一切の始末をつけてくださる主、完成される主がおられるのです。

(記 説教要約奉仕者)